

2024年の
テーマ
備中国の色につながる風土

～色に宿る地域の
価値観と文化の再発見～

私たちが暮らす地域を「色」という視点で観察してみると、特定の色と結びついて浮かび上がるイメージがあることに気がきます。

たとえば、「岡山県の色は？」と問われたら、何色を思い浮かべますか？

何か色が浮かんだ時、そこにはヒト・コト・場所のイメージも一緒に繋がってくるのではないのでしょうか。そして、そのイメージから呼び起こされる色も人によって異なり、同じヒト・コト・場所だとしても単一の色では表しきれないかもしれません。理屈ではなく私たちが無意識に感覚的に捉えている地域の色が姿になりました。

例えば、岡山県の西北端部にある新見市の石灰採石山の白い世界は、そこにいるだけで別世界にしているような感覚を覚えます。石灰は工業原料としてだけでなく彫刻家や美術家に提供されることにより、広く学生や一般の人々が身近にふれあい、体験することのできる美術材料としても使用され、そこには産業と文化・芸術の生きたつながりの姿が見られます。また、新見市にお住まいの皆さんにとって、ピオーネの色は紫ではなく黒なのだそうです。これは色味が黒いほど甘くて美味しいという意味合いだと知って腑に落ちるとともに、新見市は黒の物と白の物（黒は千屋牛、たたら製鉄、木炭やピオーネ、白は雪、石灰など）の生業の土地

であるという話も相まって、地域に根付いた色の認識が強く印象づけられることとなりました。

さらに、矢掛町にある白みかげ石や青石は、全く違う色の石が同じ地域で採石されていることがとても珍しく、特別な場所に思えました。その地域の、有史以来変わらない土や石の色と、時代とともに変わり続ける人々の営みについて思いを馳せると地球環境にまで意識が広がります。

日本は四季の移り変わりがはっきりしている中で、多様な色に対する感受性が高く、色につける和名からも文化の美意識が繊細に感じられます。赤い色ひとつとっても茜（あかね）、紅絹（もみ）、蘇芳（すおう）、韓紅（からくれなゐ）、臙脂（えんじ）、猩々緋（しょうじょうひ）など、漢字から色の材料や場所、その名が付けられた時代背景も含め、意味を想像できることなど大変興味深く感じます。きつと、誰もが日本の四季、春夏秋冬のそれぞれの色を思い浮かべられると思います。特に、岡山は全国でも晴れの日が多いことから、太陽が映し出す豊かな色彩がある環境は、文化芸術を育むエネルギーになっているのではないのでしょうか。

今回、たくさんの方に協力していただき、その地域に暮らす人々の思う色について調査しました。備中エリアの色の分布を手がかりにヒト・コト・場所に触れるきっかけとなれば幸いです。

人々がそれぞれ思う色は、お互いの認識に対する驚きも共感もあると思います。そこから、人々の心に描いた備中地域のモノや場所に興味を持っていたただく機会と触れ合える企画を提案し、色に広がる備中の風土を体感できる時間を設けました。非日常な特別イベントの記録も合わせてお楽しみください。

おかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!プログラム」は、金孝妍（キム・ヒョヨン）氏の企画・監修のもと、岡山県内の優れた文化・芸術資源を掘り起こし、その価値を県民の皆様が再認識することを目的として、おかやま文化芸術アソシエイツが運営・実施しています。



金孝妍 キム・ヒョヨン

<プロフィール>1980 韓国済州島生まれ。2001 École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris, France 交換留学。

2003 弘益大学校美術大学 絵画科 卒業（韓国・ソウル）。2005

弘益大学校一般大学院 絵画科修士 修了（韓国・ソウル）。2018 倉敷芸術科学大学 大学院 芸術研究科 芸術制作表現専攻博士課程 修了/2023 倉敷芸術科学大学 芸術学部 講師（～3月）現在、岡山市在住。

<主な賞歴>2017 岡山県新進美術家育成1氏賞 奨励賞。2023年4月、おかやま文化芸術アソシエイツのプログラム・コーディネーターに就任。

編集・発行者 | おかやま県民文化祭実行委員会（公益社団法人岡山県文化連盟、岡山県）
発行 | 2025年7月
問い合わせ | 公益社団法人岡山県文化連盟
〒700-0814 岡山県岡山市北区天神町8-54 岡山県天神山文化プラザ3F
URL o-bunren.jp MAIL bunkaren@o-bunren.jp
TEL 086-234-2626 FAX 086-234-8300



おかやま文化芸術
アソシエイツ
OKAYAMA Culture & Arts Associates

第22回
おかやま県民文化祭
これがOKAYAMA!
プログラム

備中国の色につながる風土

～色に宿る地域の価値観と
文化の再発見～

2024年度実施レポート

The climate and culture connected
to the colors of Bichunokuni

おかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!プログラム」では、備前、備中、美作と毎年開催地域を変えながら、岡山県内の優れた文化・芸術資源の掘り起こしやその価値を再認識していただけるような新たな視点で調査を行い、県内の人材や文化資源の領域横断的な出会いの場を作っています。2024年度は備中地域が対象で、岡山県北の新見市から県南の笠岡諸島まで南北に広がる地域を対象に実施しました。人々が思う「色」を触媒として地域のヒト・コト・場所を浮かび上がらせてみる試みです。

私たちが目にしているものには何かしら色があります。自然界にあふれる数多の色は、明確に「この色」と言えないくらい見る角度や光、心情にも影響されて変化し続けます。動物や昆虫が目にする世界の色も人間の見る世界とは異なります。すなわち世界には決まった色があるわけではなく、見る者の主観によって色が決まる、あるいは心に描いている色で世界が見えているのでしょう。人々の心に宿る色からその地域の風土を形作っているものを明らかにしてみよう。一体どんな発見があるのでしょうか。

BICHU NO KUNI

TAKAHASHI

高梁市

- 主張しすぎない灰色

吹屋の黒ベンガラ染のいる。赤だけじゃない
- 朝日に弄ばれる光る白から影なす灰色までの様々な白

備中松山城にかかる雲海。妻と2人で見た景色が懐かしい
- 雲海ホワイト

神秘的のベールに包まれる高梁の色
- 三疊紀タイムキャプセル色

成羽の化石「NARIWA Flora」
- 深緑

山々の近さ
- 青春の想い出が蘇るオレンジ

高梁のオレンジはゆべし。甘酸っぱくて美味いから
- 太陽に負けないぐらい日々を照らしてくれる赤褐色

ベンガラ色の屋根。青空とベンガラ屋根は忘れられない景色
- 備中和紙に映えるベンガラ

吹屋のベンガラ色
- ベンガラ色

吹屋地区の屋根と街並み。郵便局や特産品も全てがこの色ですよ
- 森と調和する気品あるベンガラ

高梁川流域は、かつて銅やベンガラで財を得ていたため。今も高梁市の吹屋地区では、ベンガラの街並みが残り、気品を保ち、美しさを感じる
- 味わい深く懐かしい茶色

ベンガラ、染め物
- ふんわり美しいベンガラ

吹屋のベンガラです
- レトロな街並み

ベンガラが印象的な瓦の街並み
- 町並みを灯す赤

吹屋地域がジャパンレッド発祥の地として日本遺産となっているため

ASAKUCHI

浅口市

- 晴れの青い空

初めて行った時の空の色
- オイスターグレー

磯の香り漂う寄島の牡蠣の色
- 静かな夜の深緑

夜の金光の色
- 輝く魂の色

金、金光教

HAYASHIMA

早島町

- 艶濃緑

昔はイ草の産地で有名だったと聞いています。濃い緑は実際に生えている時の色です
- 萌出る色

イ草の町
- 優しい若草色

早島町のイ草の色から

SATOSHO

里庄町

- 風色

藤井風。爽やかで、少しレトロなイメージ

YAKAGE

矢掛町

- 古くて新しい通りの色

矢掛町の重要伝統的建造物群保存地区の通りのイメージ
- 完熟の干柿色

季節もあって、これから山ノ上地域で作られていく最上干柿の色をイメージしました
- 江戸時代の頃と今、時を越える木材

矢掛本陣を見学したときに、当時のそのままの建物に圧倒されました。建物を支える柱や土壁の色が印象に残っています
- 垢抜けてるけど古風な翠

矢掛は 街並みが昔からのイメージで待とかお姫様の感じなので

KASAKOKA

笠岡市

- カプトガニブラッドブルー

カプトガニの血の色、カプトガニ博物館
- 時代の流れる青色

神島から見る海はこんな色。島々と跳める海が好きです
- 真珠のように輝く海の色

白石島など瀬戸内海の島々と海との風景、多島美が美しい。国内でも誇れる自然美
- 多島美色

カプトガニ、海の校舎、島
- もうちょっとどす黒く

笠岡といえばカプトガニだから
- 寂れた街の色

荒屋、錆、汚れた海
- ウールのマフラーのような柔らかない赤色

竹喬の描いた茜空は、よくある薄ぼんやりした橙色ではなく、赤味の強い色
- 太陽に向かって咲くひまわりの色

笠岡ベイファームのひまわり
- サピ石肌の色

白石島のサピ石の色
- 砂漠のような石

白石島の石、白石島みかげの風景

SOJA

総社市

- 自然豊かな緑

緑豊かなイメージとマスカットの色
- 優しさと生命力を感じる緑

我が家から車で行くと、一面に広がる平野の色が美しい緑なので
- 備中の調べ

造山古墳や国分寺周辺が春になると芽吹いて木々や田畑が賑やかに。柔らかな萌黄色が優しく全てを包む
- 森の木々の緑

総社の緑は森の木々の緑、自然がいっぱい
- 隠された山肌の黄土色

鬼ノ城の黄土色の土（西門）
- スペシャルゴールド

収穫前の稲穂の色
- 鬼と吉備団子と吉備路の桃

安くて美味しい
- 桃から生まれた正義のピンク

鬼ノ城や桃太郎伝説が由来の場所が数多くあるから

NIIMI

新見市

- 白いダイヤ・黒いダイヤ

あしん源流米。県内でも早場米の産地。白い石「石灰石」があり鍾乳洞もある。古くから和牛の産地、優良黒毛和種の「千屋牛」ブランド。昭和の終わりから黒く輝くぶどう「ピオーネ」の一大産地。生産量は減ったが、ブナやカシ等を原料にした「炭」もイメージされる
- 太古のロマンを懐き今をつなぐ白色

一面の白い段状の石灰石の採石場。白いイメージ。井倉洞の鍾乳石なども同じイメージ
- 鍾乳洞の奥にある神秘の青

鍾乳洞。井倉洞、満奇洞
- 青い夜空の国、新見 新見の夜空の色

新見は隠れた夜空スポット。驚きは、星の煌めきよりも夜空の色でした。なんと夜空は青かった。空気が澄んでいて、暗さが際立つからこそ景色
- 未来へつなぐ美しい緑

新見市は面積の86％森林で占める森林資源のまち。360度見渡す限り「緑」だから
- 神秘 満奇洞に行ったときの、洞窟内のイルミネーションが印象的だった。神秘的なイメージ
- にーみんカラー

大好きなにーみんの色

KURASHIKI

倉敷市

- 一覧の見方

回答者がイメージする色の名前

イメージの説明
- 石カラー

美観地区、石畳
- 倉敷の透明

マヨネーズ、カツオパック、エパール樹脂(クラレ)のシェア80%。液晶フィルム(ポパール)クラレシェア85%
- 趣のある柔らかな白

白壁のまち、倉敷の美観地区です
- パールホワイト

壁、晴れの国
- ジュシーで果汁が滴る色

倉敷・総社で穫れた桃は少しピンク色がかった薄いページュの色が熟した色
- 夜に向かう前の明るくも暗くもない青色

夕方、沙美海岸から見た瀬戸内海の色
- 誰もが似合う濃紺

児島のデニム
- 高梁川トラベルブルー

「また会いたい」旅を提供する高梁川トラベルのイメージカラー
- 歴史を紡ぐ深い青

倉敷は青デニムの青ジーンズを履いて活動する生き生きとした人をイメージします
- 藍の色のような紺色

ジーンズの青い色がピッタリ
- 経年変化を体験出来るオンリーワンの相棒

ジーンズ製品、誇り高い製品を輩出しています
- インディゴブルー

倉敷市児島のジーンズ
- 空が反映した水色

晴れた空、高梁川、倉敷川、下津井や児島から眺める静かな海
- いつも霞んだ水色

デニムではなく、下津井から見える海の色
- イ草色・ゴザの柄

西阿知のイ草、子どもの頃は、栽培、乾燥、捺染、加工の家内工場が沢山あって、干して染める匂いで、季節を感じていた
- シャインマスカット

備中の果物はいちご、桃、ぶどうなど一年中楽しめる
- 柳色

美観地区の柳の色
- 風にそよぐ美観地区の柳

柳のみどり
- 文化の薫る優しい翠

美観地区にある有隣荘の屋根です。初めて見たときになんとも周りとの雰囲気とマッチした綺麗な屋根色に感嘆したことを思い出します
- 稲穂の色

電車から見える澄んだ青空の下に広がる光り輝く稲
- 熱い鉄の黄色

子どものころの工場見学で見た水島コンビナートの製鉄所の銑鉄の色
- デミグラスソースの旨い色

えびめし、デミカツ丼
- 未来色

大原美術館
- 鳶の絡まる赤煉瓦

倉敷アイビースクエア、赤煉瓦
- 日本人のDNAと呼応する藤色

穏やかな春の日、中学生の娘の吹奏楽部の演奏を聴きに訪れた倉敷芸文館広場の藤棚の藤の花の色と、白壁の街のコントラストが最高に美しく、目を閉じるとその残像がいつでも浮かんできます
- 藍色

児島デニム

IBARA

井原市

- クラシックデニム

カジュアルなデニムの色
- アクセントカラー

ステッチの色
- 星を見る銀色

天文台の銀色のドーム

あなたの思う、
備中地域
といえば、
この色!!

を教えてください。

備中地域から思い浮かぶ色を「100色のカラーレット」から選び、その理由と、色にオリジナルの名前をつけるアンケート調査を行いました。この調査を通して、地域の人々が備中エリアに抱く「色」のイメージは、単なる色彩を超え、風景や暮らし、記憶と結びついていることが見えてきました。たとえば、緑は自然の豊かさを、白は霧に包まれる朝を思わせ、赤茶は歴史ある町並みの温もりを語ります。こうした色の背景には、それぞれの人が見てきた風景や体験があり、地域で育まれてきた文化や生活がにじみ出ています。色を切り口にする事で、備中の多様な表情や人々の思いが可視化され、地域をより深く理解することにつながるのではないのでしょうか。

調査期間

2024年9月～11月

回答数

160件

調査方法

WEBアンケート、対面ヒアリング

WORKSHOP REPORT

オリジナル
ワークショップレポート

Jam tun × Material Library

2024年9月15日(日)開催

アフリカのカラフルな布と IDEA R LABの マテリアルを使って 自作巾着を作ろう！

jam tunのカラフルでポップな柄のアフリカ布の端切れと、IDEA R LABのマテリアルライブラリーで整然と仕分けされた色とりどりの廃材という、“捨てられたり廃棄されたりする布やモノ”を活用して新たな価値を生み出すワークショップを行いました。

素材として提供された山盛りの端切れや廃材を前に、子どもも大人も、県外や海外からのゲストも皆創造力を掻き立てられた様子です。生成りのシンプルなトートバッグや巾着をベースに、アフリカ布ならではの大胆な柄の端切れを思い思いの形に切り取ったり、おおよそ廃材と呼ぶには似つかわしくない可愛らしいボタンやファスナーなどを貼り付けたり、チュールレースのような異素材と組み合わせたり。真剣な表情で集中して作業を続け、あっという間の1時間でした。参加者それぞれに、オリジナルなデザインの作品が完成しました。

Colorful
アフリカ布と
色とりどりの廃材

カラフル



〈ワークショップ講師〉

田賀 朋子(たがともこ)

1989年生まれ、岡山県矢掛町出身。大学卒業後、マンチェスター大学大学院修士課程で「貧困と開発」を学ぶ。2014年9月に青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。ゴミ問題の啓発活動の一環として、服に使う布の端切れをリユースしてバッグやポーチを製作・販売する活動の支援に取り組む。16年9月に帰国した後、岡山県内の観光案内所で働いたかわら、jam tunを開業。
WEB <https://jamtun.com>

〈jam tun (ジャムタン) とは〉

セネガルで使われているブラール語で「平和しかない」「平和だけ」という意味。青年海外協力隊員としてセネガルの小さな村で2年間を過ごした矢掛町出身の田賀朋子さんが、帰国後に現地の小さな村の仕立屋さんと一緒にものづくりをするために立ち上げたフェアトレード*のアパレルブランド。

※フェアトレード…途上国の生産者と先進国の消費者が公正な取引を行うことで、貧困や児童労働などの問題を解決することを目指した取り組み



〈ワークショップ協力・会場〉

IDEA R LAB

クリエイティブリユースの実験室

〒713-8122

岡山県倉敷市玉島中央町3-4-5

TEL 086-486-2320

IDEA R LABは、ミュージアム・エデュケーション・プランナーの大月ヒロ子氏が2013年に倉敷市玉島にオープンしたクリエイティブリユースの拠点。築300年の古民家を改修した居心地のよい空間でワークショップ等のイベント、クリエイター・イン・レジデンス等を行う。地域住民や工場・店舗から集めた布や木材、機械の部品等の多種多様な廃材を資源として活用するための「マテリアルライブラリー」を備え、ここでは廃材がその形や色などの特性を元に分解・整理され一覧性高く保管およびディスプレイされている。ドネーション制の物々交換スペース「アゲモラ」、共用農園「ラポファーム」など、地域の方々と協働するプロジェクトも。モノの循環だけでなく、人やコトが緩やかにつながるコミュニティが生まれている。

「jam tun」は「IDEA R LAB」の「いずれも備中地域を拠点にしており、度々コラボレーション企画も行う両者の共通点は、扱う素材がカラフルで目を奪われること、そしてアップサイクル、リユースの視点で取り組みが続いていることである。」
「jam tun」で使用するものは、カラフルな色柄が特徴的な「アフリカンプリント」と呼ばれる生地。色柄の種類は無限大で同じ柄の生地を探そうと思っても、二度と出会えないこともしばしば。
隅々まできれいな色や柄がある生地は小さくなくても魅力的なので、「jam tun」では端材をなるべく出さない裁断パターンを意識し、小さな生地も素材として活躍させるなど、ゴミと捉えられていたものに付加価値を付け加えるアップサイクルなもののづくりに取り組んでいる。
セネガルではじまったものづくりは、岡山との繋がりが大切にしており、遠い国から届いたカラフルな生地と、岡山の素材や作り手と掛け合わせた作品(岡山の特産品であるデニムや帆布生地と組み合わせた小物やバッグ。地元企業とコラボした足袋型シューズ。岡山市のA型事業所と協働で制作するオーダーメイドの日傘づくり)が生まれている。



ORIGINAL WORKSHOP REPORT

2024年9月28日(土)開催
Teruyasu MATSUMURA
× Ishibiki CACAO issai

オリジナル
ワークショップレポート



〈ワークショップ講師〉
松村 晃泰(まつむら てるやす)

彫刻家。1974年京都市生まれ。現在岡山市在住。チョコを通して石の文化を矢掛町から世界に発信したい思いで、白みかげ石で囲まれたチョコレート専門店「石挽カカオ issai」の代表社員も務めている。1999年大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科(彫刻)修了。2018年 World Snow Festival 第2位(グリンデルワルト/スイス)、2019年 国際雪像彫刻チャンピオンシップ2019(ブリッテンリッジ/アメリカ合衆国)、2020年 石〜3人のかたち〜(岡アートギャラリー / 岡山)、2021年天ブラ・セレクション vol.95 松村 晃泰 展「視線の行方」(天神山文化プラザ/岡山)、2022年 ザ・のみぎりズム2022 [企画・参加] (矢掛町/岡山) など国内外で活動。

〈会場〉やかげ町家交流館
〒714-1201
岡山県小田郡矢掛町矢掛 2639
TEL 0866-63-4446



「やかげ町家交流館」で、白桜みかげの白とすり棒を使い、カカオ豆からチョコレートを作るワークショップを開催しました。彫刻家・松村晃泰さんが制作した白とすり棒を用い、矢掛町の石材やカカオについての解説も行われました。参加者は焙炒後のカカオ豆の皮をむき、温めた白の上でカカオニブをすり潰しました。香ばしい香りが広がる中、カカオの色と質感が変化する様子を楽しみました。最後に砂糖をお好みの量を加えて練り、型に入れて冷やし、チョコレートが完成。昔ながらの石の道具が生み出す味わいの奥深さと香りや色などを直に感じられる貴重な体験となりました。

白みかげ石でカカオ豆から
チョコレートを作ってみよう！

〈ワークショップ協力〉
石挽カカオ issai
カカオの美味しさ楽しさ奥深さを追求した自社製造のカカオ商品を販売

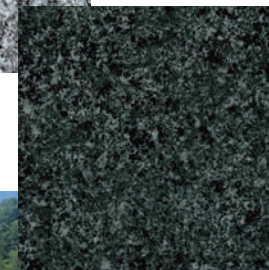
営業時間：平日 12:00〜17:00 / 土日祝 11:00〜17:00
定休日：火・水
〒714-1201 岡山県小田郡矢掛町矢掛 3074-1
TEL 0866-63-4245

石とカカオの おいしい関係

Shiro to Ao

白と青が織りなす石の風景
矢掛町の白桜みかげと備中青みかげ

白と青



矢掛町は、江戸末期頃より採掘が始まった約6600万年前の白亜紀末に生まれた「白桜みかげ」(花崗岩)と、丁場が開かれて歴史が浅く、埋蔵量も豊かな緑がかった青色の「備中青みかげ」(閃緑岩)という、異なる色と種類の石材が採石される地域。一般的に、日本の石材産地は特定の石種や色調に特化していることが多く、矢掛町のように、同一地域内で異なる種類や色調の石材が採石されるケースは少ない。

「白桜みかげ」は、白色の際立つ花崗岩であり、緻密な組成と美しい輝きを持つ。長石や石英が主体であり、建築材や彫刻にも適している。岡山県内では墓石や記念碑、神社仏閣の建材として重用されてきた。一方、「備中青みかげ」は、青みがかった深い色合いを持つ閃緑岩である。鉄やマグネシウムを多く含むことで生まれるこの色合いは、落ち着いた重厚感を演出し、耐久性にも優れている。そのため、城郭や石垣の材料として使用されてきた歴史をもつ。また、水を含むことでさらに色が深まり、湿度の高い環境下では異なる表情を見せる。

「白桜みかげ」と「備中青みかげ」は、時代の流れとともに建材からアクセサリや生活に密接なものの活用にもまで広がっており、地域の地質や歴史、文化を映し出す貴重な素材である。これらの石の色が持つ美しさは、日本のものづくりの精神と結びつきながら、今もなお現役で地域の文化や伝統を豊かにする要素の一つになっている。

日本の色

Nihon no Iro

風土が生む色

— 日本画の絵具とその多様性 —



日本画の絵具は、岩絵具をはじめ、虫・植物・鉱物など多様な自然由来の素材から生み出されてきた。岩絵具は天然鉱物を粉砕し、膠で定着させることで絵具として発色する。「胡粉（ごふん）」は白色顔料として重宝され、牡蠣や蛤の貝殻を粉砕して作られた。粒子の細かさによって光沢や透明度が変化し、岩絵具の発色を引き立てる効果がある。黄色顔料である「藤黄（とうおう）」は、かつて東南アジア原産の植物ガンボージの樹脂から作られた顔料で、独特の鮮やかさが特徴である。赤系の中には、サボテンに棲息するカイガラムシから得られる動物性顔料で「コチニール」という透明感ある深い赤色もある。

岩絵具の色名は、自然界の色や日本の伝統文化に根ざしたものが多い。「柳葉裏（やなぎはうら）」は葉の裏の繊細な緑、「碧灰末（へきかいまつ）」は青みを帯びた落ち着いた灰色、「藤袴（ふじばかま）」は秋の七草の一つであるフジバカマという植物の名前に由来。「藍（あい）」は、植物の藍草から抽出される青色で、染色にも広く使われてきた。日本画の色は、単なる絵画材料ではなく、風土や文化、歴史の中で育まれてきたものづくりの結晶である。産地ごとの鉱物や植物の違いが色に個性を与え、時代とともに技術が進化しながらも、古来の色名や伝統的な技法が受け継がれている。この多様な色彩の継承こそが、日本画の奥深い魅力の一端をなしている。

日本画の絵具を使って秋を描こう

日本画の絵具を使って秋の色の葉っぱや花を描くワークショップを倉敷芸術科学大学で開催。倉敷芸術科学大学の澁澤星准教授、原田よもぎ助教、潮嘉子技術補助員の指導のもと、広々としたデッサン室で行いました。参加者は木製の丸いうちに葉っぱや花などの絵柄を写し描いて、墨で骨描きをしました。その後、普段使う絵具とは異なる岩絵具や胡粉を用いて彩色しました。日本画の絵具の使い方や「垂らしこみ」という技法も学びました。岩絵具は塗った時と乾燥後の色が変わるので、粉の状態の絵具の色を参考に鮮やかな色を楽しみました。また、鉱物の粒子の大きさによる発色や質感の違いを実感し、日本画独特の色彩の魅力に触れることができました。



ORIGINAL WORKSHOP REPORT オリジナルワークショップレポート

倉敷芸術科学大学 presents
2024年10月26日（土）開催

〈ワークショップ講師〉



澁澤 星（しぶさわ せい）
1983年東京都生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了。博士号（美術）取得。2013年第68回春の院展初入選、翌14年再興第99回院展初入選。同年第7回秀桜基金留学賞に採択されトルコとフランスに渡航。2024年～倉敷芸術科学大学芸術学部芸術学科准教授。これまで東京・小林画廊を中心に個展・グループ展、国内外のアートフェアへの参加多数。



原田 よもぎ（はらだ よもぎ）
1995年生まれ。2018年倉敷芸術科学大学芸術学部デザイン芸術学科日本画研究室卒業。2020年同大学院芸術研究科美術専攻日本画研究室修士修了。2023年同大学院芸術研究科芸術制作表現専攻修士号（芸術）取得。2024年～倉敷芸術科学大学芸術学部芸術学科助教。「字のない物語を描く」をテーマに制作活動を行う。主に日本画画材を使用した作品を制作しており、近年は新しい屏風表現をメインに研究している。その他、美術館などでの日本画ワークショップ活動などを行う。



潮 嘉子（うしかこ）
1998年鳥取県生まれ。2020年倉敷芸術科学大学芸術学部デザイン芸術学科卒業。2022年同大学院芸術研究科美術専攻修士課程修了。2020年倉敷芸術科学大学卒業制作展にて加計勉大賞、買い上げ賞、岡山大学薬学部長賞を受賞。2022年同展にて加計美術館賞、芸術研究科賞を受賞。

〈ワークショップ協力・会場〉

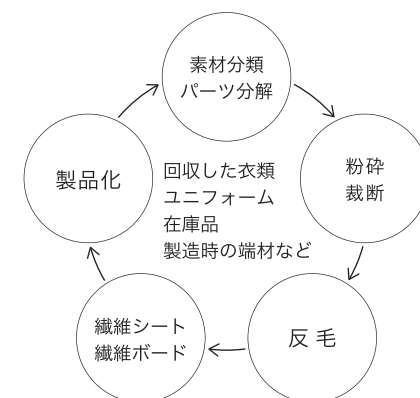
倉敷芸術科学大学
岡山県内で唯一日本画を学べる芸術大学
〒712-8505 岡山県倉敷市連島町西之浦2640
TEL 086-440-1111（代）

青色

Aoiro
児島の
デニム
再生
フェルト



写真提供：株式会社 GREEN FLAG



繊維産業が盛んな地域には、加工の際に生じる裁断くずや廃棄繊維専門の回収業者が存在する。回収された繊維は分別、裁断、粉碎、開繊などの工程を経て綿状に戻され、再び繊維として利用される。これらの工程を反毛（はんもう）という。

倉敷市児島地域は、日本有数のデニム産地として知られ、その深い青色は風土と職人技が生んだ象徴的な色である。この青も、反毛によって新たな形に生まれ変わる。それが「再生フェルト」。デニム製造時に生じる廃棄繊維を活用し、倉敷市玉島の工場で生み出されている。

繊維100%で接着剤不使用という環境を配慮した製法で作られた「再生フェルト」は、吸音性・断熱性に優れ、通気性が良く、湿気に強く、反りにくい特性をもつ。現在の主な用途は、水島地域で作られる自動車のダッシュボードや燃料系のエアフィルターなど限られるが、デニム由来の青みが独特の風合いを生む「倉敷の再生フェルト」は、その特性からファッション系をはじめ、今後、多方面での活用が期待される。

ファッションコンサルタントの正宗幸子氏は「倉敷の再生フェルト」にいち早く着目し、児島のデニム産業が生み出す資源循環の可能性と再生フェルトの活用をサポートしている。再生フェルトの活用により、衣類の3R（リデュース・リユース・リサイクル）を推進。不要な衣類を減らし、長く愛用する意識を高めるとともに、まだ使える衣類は寄付や譲渡で再活用し、着られなくなった衣類は素材として再生している。

近年、「スローファッション」※や「多様性」といった価値観が広がり、持続可能なものづくりへの関心が高まっている。児島の青色デニムが生み出す資源循環の取り組みは、地域の風土と結びつきながら、新たな可能性を切り拓いている。

※スローファッション…人権や環境・動物に配慮して作られたファッションアイテム。消費者がほんとうに必要なものを厳選し長く愛用する取り組み。

児島の青色 デニム再生フェルトを使って コースターを作ってみよう！

2024年10月27日（日）開催
with FASHION co. x 3R

オリジナル
ワークショップレポート

児島のデニム再生フェルトでクリスマスツリーやコースターを作り、好きな形や飾り付けをするワークショップを倉敷市美観地区内にあるLOGIN Kurashikiにて開催。デニム色の「再生フェルト」を直に触れながら繊維製品の再生の1つの方法を知る機会となりました。さらに、ファッションコンサルタントでありwith FASHION co.代表の正宗幸子さんの指導を元にパーソナルカラー診断を実施。衣類の3Rの「リデュース：自分に似合うファッションを知って、無駄なお買い物をしない」という購買行動の意識を高めました。会場には「再生フェルト」について図入りの説明や資源循環に関する内容を展示し、児島の青色デニムの魅力と、持続可能なものづくりについて考える時間となりました。

〈ワークショップ協力・会場〉

つなぐ倉敷

伝統・文化・産業・自然が色濃く残る高梁川流域の観光のハブとなる施設。

営業時間：火～金 10:00～16:30

土・日 10:00～17:30（定休日：月曜日）

〒710-0055 岡山県倉敷市阿知 2-20-9

https://www.instagram.com/tsunagu_kurashiki/



〈ワークショップ講師〉

正宗 幸子（まさむね さちこ）

with FASHION co.代表。ファッションコンサルタント。ファッション業界45年目。倉敷芸術科学大学 非常勤講師、一般社団法人カラーコーディネーター協会 パートナー・認定講師、岡山県地球温暖化防止活動推進員、JDC（ジャパンデニムコレクション）2024実行委員等。

資格：パーソナルカラー・ライフケアカラー、顔タイプアドバイザー、骨格スタイルアドバイザー1級等。



ORIGINAL WORKSHOP REPORT

ORIGINAL WORKSHOP REPORT

オリジナル
ワークショップレポート

Yunkyung LEE × SATO BENI SHOUTEN

2024年11月10日(日)開催



〈ワークショップ講師〉

李 兪京 (い ゆんぎょん)

1978年韓国ソウル生まれ。母国の大学で衣装デザインを専攻した後、ファッションアクセサリデザイナーとして勤める。2009年来日してから植物染料による染色を学び、繊維素材を用いた造形作品を制作。舞台美術、オブジェ、インスタレーション作品などを発表。2015年倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科芸術制作表現専攻(博士課程修了)。2018年第11回岡山県新進美術家育成「氏賞」大賞受賞、2020年個展「小舟によせる唄」高梁市成羽美術展、2021年『Autumn Concert』舞台美術(広島)、2022年『第6回ニシガワ図鑑』舞台美術(岡山)、2023年第24回倉敷新鋭作家選抜美術展他グループ展多数。

〈会場〉たいこまるプラザ

〒719-2341 岡山県高梁市成羽町吹屋851-1

TEL 0866-42-3211 (成羽地域局)

高梁市「たいこまるプラザ」で、小学生から大人まで幅広い世代が集まり赤とうがらしとペンガラを使った染色ワークショップを開催しました。講師は、自然染めや舞台美術の分野で活躍する李兪京さん。参加者は、色の変化を体感しながら、それぞれの「赤」を自分の手で染め上げました。参加者は、煮出した赤とうがらしの染液に巾着袋を浸し、植物染料ならではの優しい発色や香りを体感しました。一方、ペンガラ染めでは、筆やスタンプで自由に模様を描き、乾燥・洗浄を経て深みのある赤色を定着させました。変化しやすい植物の赤と、色褪せにくい鉱物の赤。それぞれの特徴を学びながら、吹屋で生まれた伝統の色と、今なお人々の暮らしを彩る色のつながりを感じる機会となりました。



〈ワークショップ協力〉

佐藤紅商店

「吹屋の紅だるま」赤柚子胡椒をはじめ、高梁市から全国に「暮らしに遊びと美味しさ」を伝える商店

営業時間：9:30~16:30 (土日は10:00~17:00)

定休日：月・木 (祝日は営業)

〒719-2341 岡山県高梁市成羽町吹屋851-1

TEL：080-1487-6077

真っ赤な 高梁市吹屋とうがらしと ベンガラで染め物体験



高梁市吹屋地区は、江戸時代から続くベンガラ(酸化鉄顔料)の産地として知られ、独特の深い赤色が町並みや工芸品に息づいている。吹屋の赤は、鉱物由来の色として歴史的な価値をもち、建築や染色に幅広く用いられてきた。一方、近年では佐藤紅商店が高梁市で赤とうがらしを栽培し、紅い柚子胡椒を製造するなど、新たな赤色のものがづくりが生まれている。

ベンガラ染めは酸化鉄(Fe_2O_3)の微細な粒子を布に定着させることで発色する。ベンガラは光や水に強く、防虫・防腐効果があるため、古くから建築資材や染料として用いられてきた。その色合いは、落ち着いた赤褐色であり、時間とともに深みを増す特徴がある。対して、赤とうがらしの赤は、カブサンチンやカプソルビンなどのカロテノイド色素(動植物が持つ、自然界に存在する黄色や赤色の色素の総称)による。これらは油溶性のため、水だけでは繊維に色が定着しにくく、染色にはエタノールや酢を使って色素を抽出し、ミヨウバンや鉄媒染で発色を調整する必要がある。その結果、植物由来ならではの鮮やかで温かみのある赤が生まれる。赤とうがらしを水で煮出して染色すると、極めて淡い橙色に染まる。ベンガラのように受け継がれる赤と、赤とうがらしの加工や工夫によって多彩な表情を見せる赤。伝統的な色と現代の色のつながり、そして地域の風土が生み出す色の多様性が地域文化の豊さを物語っている。





ORIGINAL WORKSHOP REPORT

オリジナル
ワークショップレポート

Ashidachi Lime Industry Co., Ltd.
× Radek PREDYGIER

2024年11月13日(水)開催

〈ワークショップ講師〉
ラドスワフ・プレディギエル
(愛称：ラデックさん)
ポーランド生まれ。瀬戸内市在住。専門はフレスコ画。1998年ワルシャワ国立芸術大学卒業、3年間同大学アシスタントとして勤務。2004年日本に移住。備前福岡、白石島、吹屋、児島、美咲町などのアートイベントに参加。ポーランドの小学校、パリ、美咲町、牛窓ホテルリマーニでフレスコ画を制作。ポーランド、フランス、ドイツ、日本でグループ展。「ズグラフフィートin瀬戸内市オープン美術館」の取り組みを継続している。「ズグラフフィート」による壁画の制作で使用する消石灰は、岡山県新見市のももの。高梁川水系の地域資源を活用しながら新しい風景を生み出していく。

普段は見ることでできない石灰石鉱山の世界をのぞける体験ツアーを新見市で開催。参加者は足立石灰工業に集まり、まずは広大な採掘現場を見学しました。展望台から見渡す石灰岩の階段の光景は、まるで特撮映画のロケ地のよう。行き交う重機も小さく見えるほどダイナミックな白の世界を堪能しました。後半は採掘された石灰石を使って伝統壁画技法のズグラフフィートに挑戦。瀬戸内市在住のフレスコ画アーティスト、ラデックさんの指導を元に、石灰モルタルの下地を二層に分けて削りながら、好みの絵柄を描きます。乾く前の下地が崩れないようにと、参加者も真剣な表情に。ワークショップの最後には、石灰入りクッキーで、食を通じた石灰体験も味わいました。



〈ワークショップ協力・会場〉
足立石灰工業株式会社
自社鉱山からの石灰石の採掘・加工、生石灰、消石灰の販売まで手がける石灰総合メーカー
〒718-0006 岡山県新見市足立3893
TEL 0867-95-7111 (代)

あなたの知らない石灰の世界 採石場見学とズグラフフィート体験 話題の「sekkaiこいしクッキー」付き



一般的に石灰石は白いイメージを持たれており、炭酸カルシウムの純度が高い石灰石を焼成した生石灰、水を反応させた消石灰は白色をしている。不純物を含む石灰石は黒っぽく、灰色や茶色をしていることもある。多くの鉱山では重機や発破で地面を削って石灰石を掘る「露天掘り」が行われ、広大な敷地に白い石灰棚が広がる庄巻の光景をつくりだしている。

中国山地に囲まれた新見市は、地域の大半が標高400m以上の石灰岩質という地質的特性があり、日本有数のカルスト台地として高純度の石灰石を産出。市内には採掘現場や生産工場が点在している。新見に本社を置く「足立石灰工業株式会社」は、1944(昭和19)年の創業から80年以上の歴史を持つ石灰の総合メーカーとして加工、製造、販売までを自社で行う。同社は露天掘りを採用し、新見市内に約13ヘクタールの採掘場を所有。見渡す限り白い大地が広がる景色は特撮映画の世界観を彷彿とさせ、巨大な工場群と共にダイナミックな生産現場となっている。

石灰石(せっかいせき)は、炭酸カルシウムを主成分とする天然鉱石のことで、セメントの原料をはじめ鉄鋼、化学、建設土木、肥料、食品といったあらゆる産業に活用される素材として採掘されている。日本は石灰石の豊富な国であり、全国各地の石灰岩地帯には、石灰岩が雨水や地下水によって浸食されて生じた鍾乳洞が見られる。石灰石鉱山も全国に分布しており、重要な資源として私たちの生活に欠かせない役割を果たしている。

白色 石灰石鉱山に 広がる白の世界 Shiroiro